

京都市の第41週のインフルエンザの定点当たり報告数は、11.47(前週8.91)、全国は12.81(前週11.35)と、ともに増加し、注意報レベルの基準値である「10」を超過しました(図1)。※下記報道資料ホームページ参照

本市のインフルエンザの発生状況について、前シーズン(2025/2026シーズン)は、シーズン入りの第36週から流行入りの目安である「1.0」を超過していました。その後、第44週に12.03と急激に増加し注意報レベルとなり、第46週には40.26で警報レベルの基準値となる「30」超過、さらに第48週に52.69で1度目のピークを迎えた後一旦減少し、その後、再び第2週から増加し、第7週に43.20と2度目のピークを迎え減少しました。

今シーズン(2026/2027シーズン)もシーズン前の第34週に流行入りし、今週(第41週)で注意報レベルを超過と、前シーズンに比べて早い時期に報告数が増加しています(図1)。

都道府県別では、前週時点で注意報レベルを超過していたのは、関東地方及び九州地方を中心に16都県でしたが、今週は、29都道府県全国に急拡大しており、今後さらに流行拡大が予想されます(図2)。

今シーズンのこれまでの全国のウイルス型別検出割合を過去2シーズンと比較すると、今シーズンはA(H1)pdm09型が98.1%でほぼすべての割合を占めており、2シーズン前の2024/2025シーズンとに近い割合となっています。

インフルエンザは感染症法上5類の定点把握感染症に分類されており、インフルエンザウイルスを病原体とする感染症です。ウイルスに複数の型があるため、同じシーズン中に複数回感染することもあります。

インフルエンザの症状は、38℃以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛など全身の症状が突然現れます。併せて、のどの痛み、鼻汁、せきなどの症状も見られ、小児ではまれに急性脳症を、高齢者や免疫力の低下している人では肺炎を併発する等、重症化することがあります。

このため、65歳以上の高齢者では、重症化予防のため、インフルエンザワクチンの接種が推奨されています。ワクチンを接種すれば、インフルエンザに絶対に感染しないわけではありませんが、発病後の重症化や死亡を予防することに関して、一定の効果があることが認められています。本市においては、65歳以上の市民を対象にインフルエンザ定期予防接種が令和8年10月1日～令和9年1月31日に実施されています(下記ホームページ参照)。重症化予防のため、積極的にインフルエンザワクチンを接種をしましょう。また、感染防止のために手洗いや咳エチケットの励行、免疫力向上のためにバランスの取れた食事や十分な睡眠などを心掛けましょう。

○令和8年度 京都市高齢者インフルエンザ定期予防接種について(京都市情報館)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000345503.html>

○【報道資料】インフルエンザの定点当たり報告数が注意報レベルになりました(京都市情報館 医療衛生企画課)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000359339.html>

図1 インフルエンザの推移グラフ

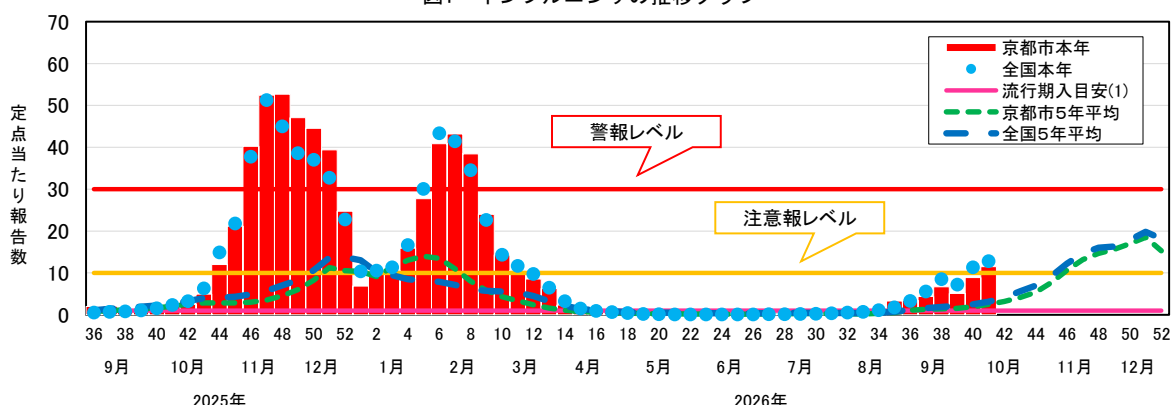


図2 都道府県別定点当たり報告数の推移

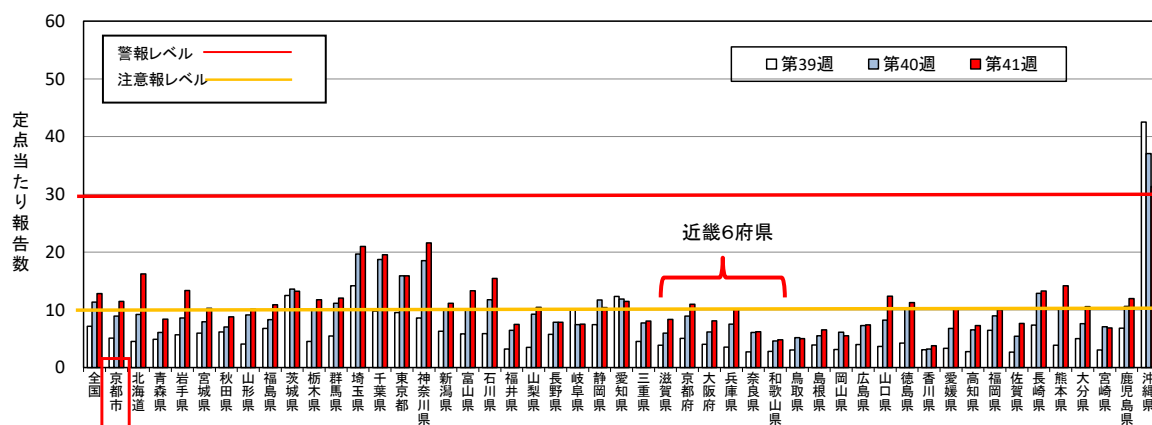


図3 全国の過去3シーズンのインフルエンザウイルス型別検出割合

